

I

次の文章は、近現代東アジアにおける美術を、文化的な「境界侵犯」という観点から論じたもので、中国系の現代アーティスト、シュー・ビンによる、漢字に似た創作文字を用いた書画の作品をとりあげています。これを読んで後の問いに答えなさい。

シュー・ビンの書は、中華文明が公認してきた漢字体系からみれば、公然たる贗作にして擬態にすぎぬという限りで、自らの創作出の偽モノ性を憚らず公言する。彼はまず一方では、自らの創作が偽物であることを、ほかでもない中国の公衆に対して包み隠さず訴える。実際、漢字文明圏の成員であれば、誰しも容易に、シュー・ビンの漢字が偽物でしかないことは見抜けるはずである(それが、漢字文明圏の成員の証にすらなりえる)。ところがそのうえで、彼の作品は、もっぱら西側世界の観客を標的としている。それは、彼の文字を解読できないことを前提とした観客である。むしろ西側世界の観客としても、シュー・ビンの「漢字」が漢字としては解読不可能なことから、知識としては知っていないよう。だがそうした観衆には、彼の創意工夫による偽文字が判読不可能であるという事実を判読する能力が、原則的には想定されていない。言い換えれば、解読できない偽文字であることを見抜けない人々こそが、好適な顧客なのだ。たしかに彼らは「文言」なのだ、彼ら自身は、シュー・ビンの作品を前にして、いかに自分たちが「文盲」なのか理解できない。

となれば、シュー・ビンは、一種の確信犯だといえるだろう。というのも彼は、自らの贗作漢字あるいは紛い物の漢字を公衆に対して展示するにあたって、自分が公衆を欺いていることに自覚的だからだ。それなら、この紛い物が功を奏するのは何故なのか。それは「自分たちがいかに欺かれているかを理解できない人々」を騙しているだけではなく、それよりも大切なこととして、「自分たちが担がれていることを重々承知している人々」をも、シュー・ビンが抜け目なく、味方に取り込んでしまっている、という周到さにあるはずだ。

それにくわえて、昨今ではシュー・ビンは自分の偽漢字は学習すれば読解できるし、習得することだって可能だと言い立て始めている。実際彼は、自分の創作した文字を、漢字という表意文字の構成原理に則って増幅させている。基本的な部首を組み合わせることで、漢字は新たな語義を獲得し、それを伝達する自己組成の力学を蔵している。この漢字ならではの機動性を頼りに、シュー・ビンは自らの偽文字をブラッシュアップ(brush up)し、ヴァージョンアップ(version up)した。は

たしてその成果は、正統なものとして認証されるのだろうか。だがそれは、将来における社会的な認知の問題であって、作者本人が全面的に責任を負う筋合いのものではあるまい。当初の海賊行為(というのも、それは、社会的な認知を得ない、偽金造りならぬ「偽文字造り」だったのだから)が少しずつ権威を帯び、最後には社会において、代替的なコードとして、まっとうに伝播循環されるに至る。そうした経緯を見事に擬態して演じたひとつの好例を、シュー・ビンに見ることも許されるだろう。

実際、歴史を振り返ると、同様の新字体創作は漢字文明圏の周縁部において、何度となく繰り返されてきた。シュー・ビン発案の字体に近いものから見るならば、契丹文字(九二〇年頃に制定)や、西夏文字(一〇三六年頃に制定)あるいは女真文字(一一九二年に制定)は、北方の遊牧民族によって、中原の漢字文化圏への対抗を意図して発明されたものと見て、間違いないだろう。不必要なまでに複雑な文字構成からは、北方騎馬民族の中華の民に対する屈曲した劣性複合を読み取りたくなる。だが、これらの「偽」漢字は、王朝によって正統なる文字とのお墨付きを得るや、公式な国事文書において、大手を振って使われるようになる。

その経緯や形態は様々だが、そこには周縁文化圏の中央に対する、抵抗の様子を読み取ってもよからう。日本におけるカタカナやひらがなも例外ではない。前者は漢字の部首の一部、後者は略字草書体を利用して表音文字を創案したものが、これは漢字では表記に不便な地域言語を擁護することにつながった。正規の漢文に対しては、補助的・従属的な役割に甘んじたが、女性の使用者たちは、やがて日本を代表する文学の書き手となる。李氏朝鮮の世宗による訓民正音の制定(一四四六年)は、世界でも稀な、あるいは唯一の完全に人工的な表音字母の開発といえる。ハンブルもまた長らくのあいだ、表向きの漢字使用に対して従属的な位置にあったが、半島の民族主義が高まると、その受け皿として正統性を獲得し、やがては漢字排斥の根柢とされるまでの民族的矜持を託され、誇り高い地位を授けられる。だが、これらはいずれも、中華主義の立場から評定すれば、しよせん周縁辺境地帯の「偽文字」として遇されても仕方のない、文化的劣位の表徴に他ならなかったはずである。

(稲賀繁美『絵画の臨界——近代東アジア美術史の桎梏と命運』により、一部改変)

* 契丹文字——現在の中国東北部からモンゴル高原までの地域を支配した契丹（キタイ）で作られた文字。

* 西夏文字——現在の中国西北部を支配した西夏王国で作られた文字。

* 女真文字——現在の中国東北部に女真族が建国した金王朝で作られた文字。

* 中原——辺境に対する中央。中華文明の中心地。

* 訓民正音——朝鮮語を表記するために作られた表音文字ハングルの古称。

問一 傍線部(a)について、なぜ「解説できない偽文字であることを見抜けない人々こそが、好適な顧客なのだ」といえるのか、説明しなさい。

問二 傍線部(b)の「抜け目なく、味方に取り込んでしまっている」という周到さ「とはどういうことか、説明しなさい」。

問三 傍線部(c)の「そうした経緯を見事に擬態して演じた」とはどのようなことか、何が何を「演じて」いるのかを示しながら説明しなさい。

問四 本文で述べられるアジアの新字体創作の文化的特徴について、傍線部(d)の「屈曲した劣性複合」という観点から説明しなさい。なお「劣性複合 (inferiority complex)」とは、「優越感と複合した劣等感」といった意味で使われている。